３月５日（木）雨の中にも春を感じる暖かさのなか、令和６年度加賀看護学校卒業式が行われました。以下に、式辞、送辞、答辞を全文掲載します。

学校長式辞

卒業される皆さん、おめでとうございます。皆さんは、新型コロナウイルスの蔓延下に入学を決意され、様々な制限の中、勉学を進められました。卒業のこの日を迎えられ、一層たくましくなったことと思います。

さて、本日は、この式辞を利用して最後の講義をしたいと思います。やっと国家試験が終わったのに、また勉強させられるのかと落胆の声が心に響いたでしょう。大丈夫です、皆さんのことはよくわかっています。私の最終講義はワクチンについてです。ワクチンの歴史から医療現場に出て行く矜持を考えてもらいたいと思います。

日本人が初めてワクチンを手に入れたのは、江戸時代末期、天然痘のワクチンでした。鎖国の当時、外国で有用とわかっていても手に入れることは出来ませんでした。天然痘は突然高熱を出し、カサブタが全身にできます。乳幼児の死亡率は 50%を超えました。たとえ生き残ったとしても体中に醜いあざが残り、女性なら結婚もあきらめるほど悲惨なものでした。醜い人でも好きになれば盲目になる、「あばたもえくぼ」という言葉もこの病気から来ています。天然痘は撲滅されましたが、保護者の方でも五十歳以上の皆さんには肩に種痘の瘢があるはずです。私にもあります。

このワクチンを日本に、そして北陸に命をかけて運んだのは福井藩の町医者、笠原白翁です。笠原に天然痘治療には西洋医学だと教えたのは、大聖寺の大竹了玄という医師なのです。二人で山中温泉につかり、大竹了玄は蘭学を教えました。これを題材にした映画「雪の花」が公開されておりました。松坂桃李が主役で笠原白翁役、吉岡秀隆が大竹了玄役でした。私はこの映画の医学監修をしておりました。

映画で、天然痘がある村を襲うシーンがあります。貧しい家の中で、高熱、あばたの患者が出ます。笠原は天然痘と診断し、隔離しかないと村の役人に進言します。村中の患者をあぶり出し、はずれの山の神社に隔離します。比較的元気な若い娘が付き添います。登山道で村おさから「みんなの看病をたのむぞ」と声をかけられます。時が経ち、かつて隔離されていた神社の墓の前で娘が言います。「みんな、死んで、私だけが生き残った。あばたも残って、私も死んでしまえばよかった。」と。

私はこのシーンを見て、まさにコロナ初期の頃の我々と同じだと思いました。危険とわかっていても看護する人が必要だ。死ぬかもしれない、だれもがやりたくはない、でもやらなくてはならない。覚悟を持って生きるということの気高さを教えられました。

我々は職業として、いや生き方として医療人を選んだのです。最近は、楽な職場、コスパ、タイパがよい職場が偉くて、歯を食いしばって働くことがみっともないという風潮があります。ですが、人間の社会でそんな事があるでしょうか？　今日のようなハレの日は、綺麗な衣装で豪華な食事会もあるでしょう。ですが、我々の生活は地に足をつけ、毎日の小さな積み重ねで成り立っています。その人間らしい生活を援助し、自らも助けられる職業である看護師は、とても誇らしい生き方であると確信しています。

さて、先ほどの天然痘から生き残った娘さんですが、わが子を抱いて笠原のワクチンの列に並びます。「先生ありがとう。生きている意味がわかりました。」と。

今年の卒業生は全員女性です。次の世代を生み出す性でもあります。女性として、看護師として、人生、先は長い。時には立ち止まることもあるでしょう。ですが、本日の誓いを忘れず、看護の職を全うしていただきたいと思います。

さあ、卒業生の皆さん、社会からの大きな期待を背負っての、あなたたちの新しいステージの始まりです。皆さんのご健闘を祈念しております。

令和７年３月６日　加賀看護学校　学校長

在校生送辞

厳しい寒さも次第に和らぎ、暖かい春の訪れを感じられる季節となりました。本日、加賀看護学校を卒業される３年生の皆様、ご卒業おめでとうございます。在校生一同、心よりお祝い申し上げます。

先輩方との最初の出会いは、入学ガイダンスでの交流でした。校内を回り、学校生活について説明してくださる中で、試験の勉強方法や学校生活の送り方など、多くのことを教えてくださいました。この学校での新しい生活全てのことに不安を感じていた私たちに親身になって悩みを聞いてくださる先輩方が心強く感じ、とても安心できたことを今でも覚えています。その後も新入生歓迎会や学校祭を共に準備し、当日活動する際には優しく接してくださったおかげで、楽しむことができ、この学校で過ごす大切な思い出となりました。

また、看護師国家試験に向けた勉強では、先生方に質問している姿、仲間と励まし合いながら放課後に勉強する姿を何度も見かけ、自分の夢に向かって積極的に学習する姿に私たちは感銘を受けました。これまで、先輩方も多くの壁にぶつかったり、悩んだりした場面もあったと思います。立ちはだかる壁を乗り越え、今日の日を迎える先輩方は私たちの目標となる存在です。

今､先輩方は本校での思い出を胸に､これから始まる新しい生活への不安と期待で胸がいっぱいかと思います。新たな環境で生活するだけでなく、看護師としての責任の重さに何度も悩むことがあるかもしれません。そのような時は活躍する場は違ってもこれまで同じ目標に向かって共に歩んできた仲間のことを思い出してください。これまで多くの壁を乗り越えてきた自分を信じて患者と向き合い、先輩方の目指す理想の看護師となれるように願っています。

最後に、これまで良き先輩として私たちを導き、支え、励ましてくださったことに心から感謝し、皆様の今後のご活躍とご多幸を願いまして、送辞とさせて頂きます。

令和７年３月６日　在校生代表

卒業生答辞

寒さの中に春の日差しを感じられる日が多くなり、桜の花が待ち遠しい季節となりました。この佳き日に、私たち 22 名は卒業の日を迎えることができました。本日は、このような素晴らしい卒業式を挙行していただき誠にありがとうございます。御臨席を賜りましたご来賓の皆様、学校長をはじめ諸先生方、保護者の皆様には、卒業生一同、心より御礼申し上げます。

３年前、これから出会う仲間や学校生活に希望と不安を抱きながら入学の日を迎えたことを覚えています。それからの日々は、新たな学びと挑戦の連続でした。

初めて学んだ看護技術では、ひとつひとつの動作に感染予防や安全管理の意味があり、看護は細やかな気配りの積み重ねであると実感しました。試験前には教科書を開きながら何度も徹夜をし、学ぶことの多さにくじけそうになりました。

２年生の臨地実習で受け持たせていただいた患者さんは、思うように動かなくなったご自身の体と、それでも続いていく毎日に苦しんでいました。患者さんの苦しみを目の当たりにし、この人にとってのニーズはなにか、どのような看護が必要か、患者さん主体で考えることの大切さを学びました。また、看護過程展開の難しさに直面し、自分は看護師に向いてないんじゃないかと感じたこともありました。

３年生では、７か月間の臨地実習に看護研究、臨床能力試験、国家試験と試練の日々が続きました。休む間もなく続く日々に気持ちの余裕がなくなり、家族にあたってしまい自己嫌悪に陥る時もありました。それでも最後には国家試験という大きな試練に挑み、今日の日を迎えることができたのは、支え続けてくれた家族、いつも助けてくれた仲間たちのおかげです。そして、どんな時も味方をしてくれた先生方、温かいご指導をしていただいた指導者の方々、何より未熟な私たちに看護の機会を与えてくださった患者さんのおかげです。心より感謝申し上げます。

３年間、共に歩んできた私たちのクラスは、最初は静かで控えめでしたが、それは思いやりの心を持ち、周りを見て行動できるみんなだからこそだと感じています。そんな仲間と過ごす毎日が、看護の礎となるコミュニケーションやチームワークの大切さを学ぶ機会になっていたと感じます。年齢も様々で個性豊かな仲間とは、たわ

いもない話で笑い合い、辛いときは自分のことのように助け合い、今日まで共に乗り越える事ができました。みんなと学び、過ごせたことを心から幸せに思います。

在校生の皆さん、これから先、看護職を目指す道のりの中で様々な試練に直面することがあると思います。しかし、素晴らしい先生方や仲間、家族がいることを忘れないでください。そして、忙しい中でも学校生活を楽しんでください。

本日をもって本校を去ることに名残惜しさは尽きませんが、多くの方々のおかげでこの日を迎えることができました。この気持ちは決して忘れることはありません。私たちは、これからそれぞれの道を歩んで行きます。本校で学んだ知識と技術、そして人を思いやる心を大切にしながら、心豊かな医療人であると共に、一人一人に寄り添うことのできる看護師を目指し、一歩ずつ前へ進んで参ります。

最後になりましたが、御臨席を賜りました皆様のご健勝とご多幸をお祈りするとともに、加賀看護学校がこれからも素晴らしい学校であり続けますよう祈念し、答辞とさせていただきます。

令和７年３月６日　卒業生代表